三題噺『・未来　・大都市　・イベント』

今からずっと先の未来。テクノロジーが発展した大都会の中央都市、『宙来市』のメイン広場では、季節のイベントの１つである星祭りが開催されていた。

ステージでは星の夫婦を見立てた男女が共に舞を踊り、また別の場所では職人が美しい羽衣を織る作業を観客に披露し、まるで生きているかのような星たちが川を作り、広場に集まった人々の上をキラキラと泳いでいた。

明るい太陽の下ではあれど、星たちは美しく光を放ち、晴天の青空を満点の星空のように輝かしく彩っている。

そんな、星祭りを楽しむ人々の笑顔と笑い声が広がる広場で、突如どこからか甲高い電子の警報が鳴った。

さほど大きくはないその音はBGMに紛れ込み、祭りに夢中な観客たちが気づくことはない。だが、大衆の中にいたとある男女だけは、その音に顔色を変えた。

腕に付けていた警報音の発信源であるウォッチを確認すると、二人は何もない虚空を掴む。そしてその虚空を軽く引くと、彼らの手の中に光の粉を纏いながら警棒が現れた。

「――きゃぁぁ！！」

広場に悲鳴が響き、先程まで人々の上を美しく泳いでいた星の川が、突如ビリビリと電撃を纏い不自然に震え出す。

次の瞬間、星の川は突然カクついた予測不能な動きで、人混みの中を狂ったように猛スピードで移動し始めた。

恐怖と驚きの声を上げて逃げ出そうとする人々の中で、その場に立ち止まったまま動こうとしない人影が２つ。

そして、その人影たちは手に持った警棒を同時に構えると、自分たちへと向かってきた星の川を勢いよく突き上げた。

眩い花火のような光が弾け、辺りにキラキラと星の欠片が降り注ぐ。

警棒を持った青年は、まるで雨に打たれるかのような穏やかな表情で、星の欠片に手を伸ばす。

すると、警棒にはそぐわない可愛らしいワンピースに身を包んだ女性が、腕につけたウォッチに向かって真剣な声を投げかけた。

「報告します。メイン広場にて強いエネルギー波を感知。ただいま制圧が完了しました」

彼女が持つ警棒に付いた四芒星の紋章が、降り注ぐ星たちの光を反射して煌めく。

彼らは警察の特別対策部門、宙行テクノロジー特攻部所属の刑事だ。

宙行テクノロジー特攻部とは、このテクノロジーが発展した都市で、エネルギーの波動を感知する特別なウォッチを使い、エネルギー、そしてテクノロジーの暴走を制圧する精鋭たちが集まった部門のことである。